豊前国岩戸神楽考——豊前地方の神楽にみる修験的要素について——

恒遠俊輔

はじめに

豊前国は、西海道の一国で、現在の福岡県東部と大分県北部にあたる。

その豊前国には、十二世紀以来、山伏たちによって支えられて、たくさんの山岳寺院が営まれ、修験道の大変盛んな土地柄であった。彦山霊仙寺、貫山楽音寺、普智山等覚寺、蔵持山宝仙寺、飯盛山東光寺、紅梅山松福寺、求菩提山護国寺、常在山如法寺、両界山経読堂、松尾山医王寺、宝勝山長福寺、桧原山正平寺、八面山大日寺、稲積山妙楽寺、御許山霊山寺等々がそれで、まさしく修験道のメッカと呼ぶにふさわしい。

一方、この地には、古くから多くの里神楽が伝承されてきた。なかでも、福岡県の京築地域（豊前市、築上郡、行橋市、京都郡）はとりわけ神楽の盛んな処で、今日なお神楽を伝承・保存する団体が二十八団体もあって、春祭や秋祭の折には、その年の豊作を祈願したり、豊作に感謝したり、あるいは家内安全、無病息災を願って、神楽を奉納している。神楽が奉納される鎮守の森から、笛や太鼓の音が夜の更けるまで聞こえてくるという光景は、今も昔も同じである。

山岳を神仏の宿る聖なる場所だとする修験道は、水田稲作にとって不可欠の水の源が山や森にあるということと深くかかわっているが、里神楽もまた稲作をどう順調に進めていくのかということにむけられた農耕儀礼の一つにほかならない。つまり、両者は「農業信仰」という共通項をもつ呪術的行為ということができる。

そこで、平成十一年（一九九九）に福岡県の無形民俗文化財に指定された「豊前市の岩戸神楽」を通して、神楽と修験道との結びつきについて考察してみたいと思う。

「豊前市の岩戸神楽」の特徴

福岡県豊前市は、修験道の山・求菩提山の山懐に抱かれて、今日まで歴史を刻み文化を育んできたが、そこには五つの神楽講と一つの神楽保存会とがあって、現在も活動を続けている。

その神楽の起源は定かではないが、十五～十六世紀の成立ではないかとみるのが一般的である。そして、成立期の神楽は、清め・祓いの意味合いの強い「採物舞」のみであったが、江戸時代中頃になって、演劇的要素を持つ「面神楽」がとり入れられるようになったと推測されている。また、この地方での神楽は、もともと飢饉や疫病流行などという非常の際に行われる祈禱としての性格が強かったが、次第に各神社の恒例行事として毎年奉納されるようになっていったと伝えられる。

江戸期における豊前の神楽は、神職によって舞われる「社家神楽」であった。この地域にあって代々神職をつとめてきた長谷川家の資料に、宝暦十二年（一七六二）のものとされる『御祈禱御祓岩戸神楽次第・午七月』という文書がある。その文書には神楽の舞い手および囃し方として十九名の名前が記されているが、そこに名を連ねた者はいずれも近隣の神社の神職であったことがわかっているのである。

しかしながら、明治期に入り、新政府の手によって神仏分離、神道国教化政策が推し進められるなかで、神職は明治の国家体制のなかに組み込まれて行き、その結果として「社家神楽」は廃絶を余儀なくされた。

明治二年（一八六九）の『郡触』によれば、それまで里神楽執行の際に、面と毛頭を用いてきたのであったが、この辰（明治二年）六月に田川郡香春宮の社家鶴家越後守が上京した折、神祇官から面と毛頭の使用を禁止され、昔ながらの幣神楽（採物舞）を執行するよう申し付けられたという。復古的な幣神楽が強制され、民衆を惹きつけ、いわばそれまで豊前の神楽の中心をなしてきた面神楽が禁止されたことにより、社家神楽は急速に衰退してゆくのである。

ただ、その一方で、明治十年（一八七七）前後のことと思われるが、神職たちの手によって氏子等へ神楽が伝授されていった。そして、それが今日の「神楽講」の成立につながったと考えられる（当初は神楽社中と呼ばれ、のちに神楽組あるいは神楽講と呼ぶようになった）。

さて、豊前に伝わる神楽は、能楽の手法を採り入れて神話を演じるという出雲流神楽が中心で、「湯立神楽」など一部に伊勢流の神楽がみられる（一概に伊勢流と断定すべきではないとの主張もある）。

演目は三十三番。採物舞が中心の「式神楽」と面神楽が中心の「奉納神楽」とに大別される。神楽講によって多少の違いはあるが、演目はおおむね次のとおりである。

《式神楽》

＊壱番神楽　＊花神楽　＊笹神楽　＊式御先神楽　＊弓正吾神楽
＊地割神楽　＊岩戸神楽（天之安河原之集会・柴入神楽・思兼之命舞・伊斯許理度売之命舞・八重垣之命舞・布刀玉之命舞・天児屋根之命舞・玉祖之命舞・天鈿女之命舞・手力男之命舞）

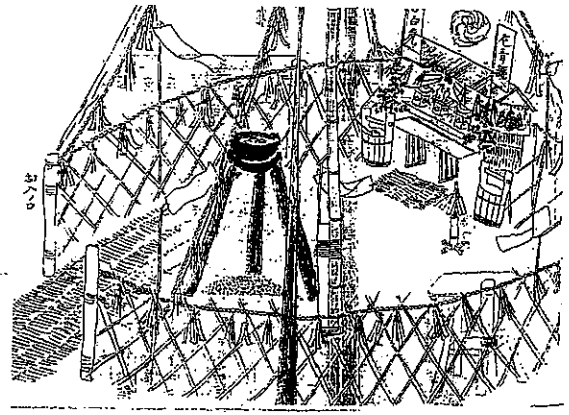
《奉納神楽》

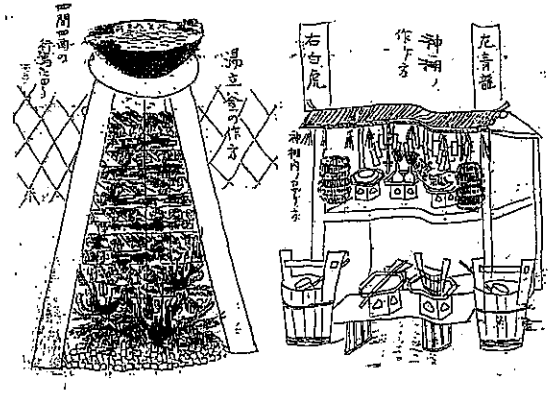
＊神送り　＊幣正吾神楽　＊三神神楽　＊四人剣神楽　＊二人剣神楽　＊剣神楽　＊盆神楽　＊綱御先神楽　＊二人手草神楽　＊乱御

先神楽　＊地堅神楽　＊本地割神楽　＊神迎神楽　＊大蛇退治神楽
＊湯立神楽（神髄神楽・湯御先神楽・火鎮神楽）

湯立神楽

ここで、豊前の神楽を特徴づけるとされる「湯立神楽」をとりあげてみることにする。





福岡県吉富町　八幡古表神社熊谷家に伝わる絵図

伊勢神宮では、「御師」と呼ばれる神職によって霜月に湯立神楽が舞われるという。それは、大きな釜に湯をたぎらせ、熱湯を振りかけて禊を行うというものである。

豊前地方に伝わる湯立神楽が、この伊勢の神楽の流れを明確に汲むものであるのかどうかは別として、熱湯に清め・祓う呪力があるとする発想はそこに共通しているであろう。

さて、豊前の湯立神楽では、まず矢来で囲まれた斎庭（ゆにわ）と呼ばれる会場が設けられ、その一角にヤシロ（斎庭神座）が作られる。斎庭の中央には、高さ十メートル余の丸竹か杉丸太の柱が、三方からの綱で支えられて建てられる。その柱を斎鉾（ゆぼこ）と呼ぶ。また、斎鉾から少し離れた場所には、湯釜が設置される。二メートルを超えるであろう高い鼎（五徳）の上に水の入った釜が置かれ、その下で薪が燃やされる。釜の湯が沸き、薪が熾になるのを待って神楽が開始される（福岡県吉富町の八幡古表神社の宮司・熊谷家に伝わる絵図参照。絵図の奥書には「祖父房重〈旧築城郡上城井村岩戸見神社宮司〉より口伝、父房義の手記、巳太郎房義に伝はる」とある）。

湯立神楽は、「神髄神楽」「湯御先神楽」「火鎮神楽」の三部構成で

ある。

まず最初に行われる神髄神楽（かんずいかぐら）は、太刀を持って湯釜にきり込み、中央および東西南北を祓う舞とされる（写真⑪を参照）。

次に、湯御先神楽（ゆみさきかぐら）は、天と地、陰と陽とを結ぶ雲手切りの舞といわれ、そこでは豊前の神楽のなかで最もポピュラーな演目である御先神楽が舞われる（写真②を参照）。御先神楽は「駈仙神楽」とも書くが、天孫ニニギノミコト一行が高天原から筑紫の日向の高千穂のクシフル岳に降り立って国土統治のもとをつくったという「天孫降臨」の記紀神話に基づくもので、幣方（へいかた）と御先（みさき）すなわち神を先導する役とが登場する。幣方は天津神のアメノウズメノミコト、鬼の面を着けた御先は国津神のサルタヒコノミコトだとされている。

この湯御先神楽の最後には、サルタヒコノミコトが斎鉾をよじのぼり、その先端につけられた御幣を切り落とすか、あるいは斎鉾のてっぺんから切り紙を撒く（写真③を参照）。

つづく火鎮神楽（ひしずめかぐら）では、一国一宮が読み上げられ、その都度、湯で祓う所作が行われる。日本国中の三一三二座の神々をそこに勧請するのだという（写真④を参照）。湯釜には人形が浮かべられ、そのヒトガタを「湯の御子」あるいは「湯神人形」と呼ぶ（写真⑤を参照）。笹を用いて釜の湯で身を清めたり、火の精と水の精とを結んで五穀豊穣を祈念したりする所作が続いたあと（写真⑥を参照）、最後に火渡りが行われ、湯立神楽はフィナーレとなる（写真⑦を参照）。

ちなみに、神楽講内には、「湯立神楽を奉納する時には必ず七日前より心身の清浄につとめる」、また「火渡りの修法をなさんとする者は七日前より肉類、葱、韮の如きは食せず、朝夕水行をなして心身の清浄に努める」との申し合わせがあり、今日でもそれは堅く守られているという。

湯立神楽にみる修験的要素

湯立神楽は、熱湯を用いて清め・祓いを行うという神事性の強い神楽であり、また神意をうかがうという「占い」的な側面をもっている。

豊前の湯立神楽の場合、そこに修験的要素が入り込み、豊前神楽をもっとも特徴づける演目となっている。

《修験的要素　その1》

豊前国独特と言われる修験道の祭に「松会（まつえ）」と呼ばれるものがある。

松会とは、豊前国の山伏たちが五穀豊穣を祈願して、まだ春浅い時期に山中で予祝行事として行った神仏習合の祭である。いつの時代に始まったのかは明らかではないが、求菩提山の場合、祭の衣裳箱の蓋が残っていて、そこに「建暦三年（一二一三）二月廿九日」の墨書があり、鎌倉時代にはすでにこの松会が行われていたことを窺わせる。

松会は、「神幸祭」「田行事」「幣切り行事」の三部からなる。

神幸祭では、神輿が繰り出され、権現がそこに鎮座しているとされ

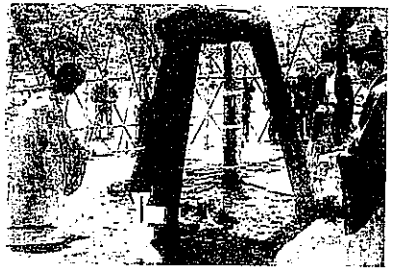


写真1　神面神楽

写真2　湯御先神楽

写真3　猿田彦命が斎鉾にのぼる

写真4　一国一宮を読み上げる

写真5　湯釜に人形を浮かべる

写真6　火の神と水の精を結び
五穀豊穣を祈願

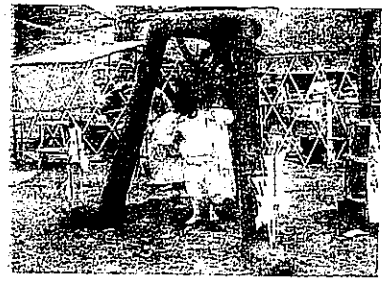


写真7　火渡り

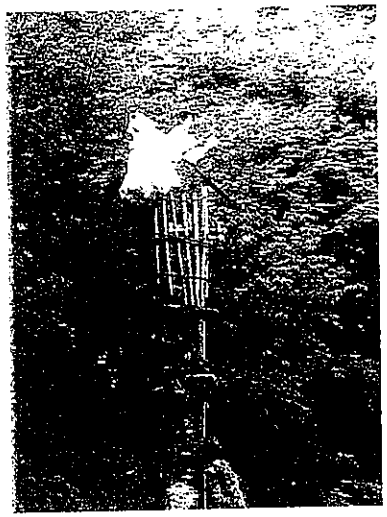


写真8　白山多賀神社の幣切り行事

る神輿にむかって「仁王経」が読誦される。つづく田行事では、「遣巻(やりまき)」と呼ばれる神歌がのどかに流れるなか、会場となる松庭で草刈り、田鋤き、田打ち、種まき、田植え、田誉めなどの農作業がユーモラスに演じられる。そして、祭を締めくくるのが幣切りの行事(松倒しともいう)である。松庭に松柱(地域によっては柱松という)が建てられ、山伏が御幣を背に持ってその松柱に登り、松柱の頂から白い御幣を切り落とす。

松庭は女性を意味する「陰」、松柱は男性を象徴する「陽」である。そして山伏が松柱の頂から切り落とす御幣は「神の御種子」であり、それは田行事の折に松庭に蒔かれた籾と交配する。人びとは、松庭の籾を持ち帰り、自分の家の籾種子と混ぜて田圃に蒔くのである。こうして、祭のなかで「陰陽交合」を演出することによって、人びとはその年の稲の豊作を確信するのだ。

湯御先神楽の最後にサルタヒコノミコトが斎鉾に登って切り紙を撒いたり、あるいは幣切りを行ったりするという所作は、まぎれもなくこの松会における幣切り行事に通じるものだと言えよう。

松会は、豊前地方のかつての修験道の山である求菩提山、英彦山、松尾山、袈裟山などで今なお三月末から四月にかけて行われているが、ほとんど「田行事」を伝えるのみで、「幣切り行事」が行われるのは、福岡県京都郡苅田町等覚寺地区の白山多賀神社だけである。かつてこの地には、普智山等覚寺があり、天暦七年(九五三)に谷之坊覚心なる行者によって修験道が創始され、最盛期は三百坊を擁したと伝えられている(写真⑧を参照)。

《修験的要素　その2》

笹で湯をはらった後、五色または白色の和紙を切り抜いて作った人形(ヒトガタ)を竹串に挟み、それを円形にした藁の束に刺して湯釜のなかに浸す。

人形はしばしば身代りとして用いられ、例えばそれで人の身体をこすると、その人の災いが人形に移るなどと言われたりする。湯立神楽における人形もまた、同様の意味を持つものであろう。そして、人形を型代(カタシロ)として、罪や穢れをその人形に託して「清め」を行うという修験の修法を想起させるものである。

《修験的要素　その3》

研究発表論集

山岳修験

第32号　修験と芸能特集

日本山岳修験学会

188.59
N 77
1-32

々の原像 祭祀の小宇宙　新谷尚紀著　1700円

日本における神とは何か。この難問に民俗学の立場から迫る。各地の神社や寺院の儀式と祭り、歴史と伝承などを通して、日本の神観念の淵源を探り、神がケガレの吸引浄化装置として生まれる仕組みを具体的に検証する。（歴史文化ライブラリー）四六判・208頁

古代の神社と祭り　三宅和朗著　1700円

古代の神社や祭りとはどのようなものか。京都の上賀茂神社の麦祭と御阿礼祭の歴史を通し、天皇中心の王権の祭りと地方神社の祭りの相違を追及。人間と自然が共生する信仰の世界から、古代の神社や祭りを見直す。（歴史文化ライブラリー）四六判・208頁

日本の祭りを読み解く　真野俊和著　1700円

いまも大勢の人々が参加し繰り広げられる祭りには、どのような時代背景や人々の思いが込められているのか。各地の民俗芸能から昭和天皇崩御の社会現象まで、様々な祭りの演出と歴史を探り、現代の祭りの意味を問う。（歴史文化ライブラリー）四六判・192頁

日本の祭りと芸能 アジアからの視座　諏訪春雄著

日本の祭りや芸能の源流を、時代を遡ってたどっても途中でとぎれてしまう。しかし視界を東アジアに広げると、あちこちに原形となった民族芸能が残っている。従来の芸能の日本民族起源論を否定する斬新な日本文化論。　四六判・282頁／3000円

神と仏の民俗（日本歴史民俗叢書）　鈴木正崇著

神と仏の複雑な関係は、知識層と一般民衆双方の心の奥深くに浸透し、強めて錯綜した交渉過程を経てきた。神楽と仏教儀礼を考察し、地域性豊かに、個性的な想像力によって創り変えてきた、民衆の精神の歴史を解明する。　A5判・370頁／6800円

田の神まつりの歴史と民俗　森田悌・金田久璋著

農村各地にいまも伝わる田の神まつり。古代社会の祭祀からその古層と転化を歴史的に検討する一方、現在の田の神まつりの事例を民俗学的に追究する。日本人の農耕生活に深く根づいた、基層文化解明の視角を提供する。　四六判・274頁／2600円

柳田国男と海の道　大藤時彦著

紀行文『海南小記』で南へと旅をした柳田の視点には、題意難が垣間みられる。また、佐渡に流れ着く禅子の古考え、『海上の道』につながる原景を検証する。

私説 柳田國男　堀田園男著

柳田園男とは、どんな人物だったのか。民俗学研究所ノートを晩年の愛弟子が語る。民俗学の体系化に傾けた情熱をわかりやすく解説。これからの民俗学を展望する。

日本を知り、日本文化を知る。新・民俗辞典誕生！

日本民俗大辞典

全2冊（上＝あ～そ　下＝た～わ・索引）

福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄 編

日本文化の「いま」をどう読み解くのか。この課題に果たす民俗学の役割は大きい。柳田国男以来の民俗学の蓄積を生かし、歴史学を初めとした人文社会科学の成果も取り入れ、日本列島に多様な姿で息づく民俗文化の全容を解明。沖縄・アイヌも視野に入れた、従来の日本民俗学の枠組みを越える質量ともに最高水準の民俗百科。

四六倍判・上製・函入・平均1140頁　各20000円　明細『内容見本』送呈

（価格は税別）

〒113-0033・東京都文京区本郷7-2-8　電話03-3813-9151（代表）

吉川弘文館

2003年版『出版図書目録』送呈
FAX.03-3812-3544／振替00100-5-244
http://www.yoshikawa-k.co.jp/

福岡大学図書館蔵書
0113689640000

ISSN 0915-0978

山岳修験

第 32 号

修験と芸能特集

2003. 11

日本山岳修験学会

SANGAKU SHUGEN

(JAPANESE MOUNTAIN RELIGION)

No. 32 November, 2003

Special Issue on Shugen and the Performing Arts

[ARTICLES]

Kagura and Shugen ····· Kazuhiko KOMATSU 1
Gongen Mai and Shugen Practitioners ····· Yoriko KANDA 9
The *Shogun Mai* of Aki and Suoo: Concerning the Intention of Divine Possession in *Kagura* ····· Yasuomi MIMURA 19
Hyuga *Kagura* and Shugen: The *Kagura* of Meira Lineage and Its Background ····· Yasuaki YAMAGUCHI 33
The *Kagura* of Shiiba and Shugen ····· Atsushi NAGAMATSU 49
The *Ontaue* Festival of Honman Shrine of Tanegashima ····· Hiroko MORI 59
On the Iwato *Kagura* of the Buzen District: In Regard to the Shugen Characteristics Seen in the *Kagura* of the Buzen District ····· Toshisuke TSUNETOU 74
The Performing Arts and Festivals of Mt. Mikoshiro of Joshuu ····· Tsutomu TOKIEDA 81
The Structure of the Matsueda Rites: The Example of *Matsuyaku* of Shouheiji of Mt. Hibaru ····· Masaki YAMAGUCHI 91
Tour Commentary: The Remains of Aso Kobouchu and Seigandenji ····· Yasuo ASOSHINA 102
Bringing the 23rd Nihon Sangaku Shugen Conference on Shiiba Performing Arts to a Close ····· Conference Executive Committee 104

Published by
NIHON SANGAKU SHUGEN GAKKAI
(Association for the Study of Japanese Mountain Religion)

発売：岩田書院　〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 4-25-6-103　定価[2800 円＋税]